90 年代後半以降の日本における語句「ジェンダー」

――テキストマイニングの社会学的利用3――

首都大学東京　左古輝人

この報告は左古(2013)、左古(2014a)などを受けて、1980 年代後半から現在に至るまで日本語逐次刊行物のなかでの「ジェンダー」という語句の用いられ方の変遷を、テキストマイニングを用いて明らかにする。

これまでの研究では 00 年代半ばまでのあいだに「ジェンダー」の用いられ方に 5 つの局面があったこと(1980 年代後半の導入、1990 年代前半の地理領域における受容、1990 年代後半から 00 年代初頭の爆発的普及、00 年代半ばの国際協力領域における受容と、月刊論壇領域におけるイデオロギー論争、00 年代後半の「ジェンダー」を関した記事の数的減少と、性暴力の主題化)を明らかにした。

本報告ではこれを補い、00 年代半ばから 10 年代半ばまでの「ジェンダー」の用いられ方を分析する。題材は国立国会図書館雑誌記事索引を検索語「ジェンダー」でヒットした記事および特集の題目である。その集計結果をみると、1)00 年代半ばをピークに、「ジェンダー」を冠した雑誌記事は現在まで減り続けていること、2)00 年代半ば以降、一本調子に出現率を増大させ続けているのは「スポーツ」、「戦争」、「格差」、「平等・不平等」、「災害」、「アジア」であることが分かる。

「スポーツ」には激しい身体接触を伴うものがあるため、暴力と親和性が高い。00 年代後半における性暴力の主題化とのかかわりが考えられる。「戦争」についても同じことが言える。「平等・不平等」は 90 年代前半以降「ジェンダー」の名のもとに議論されてきた中心主題そのものである。「格差」は絶対的貧困が問題になりにくい状況下で「平等・不平等」を議論するために、「ジェンダー」以外の言論諸領域でも 00 年代盛んに用いられたキーワードである。「アジア」への関心も「ジェンダー」に限らず多くの言論領域において高まっているのに加え、00 年代半ばの国際協力との関係も考えられる。「災害」の出現率は 10 年代に跳ね上がっているが、これは東日本大震災との関連が明らかである。

つまり 00 年代後半以降現在までにあらわれた明瞭なトレンドはいずれも 00 年代半ばまでに現れた諸要因の延長線上で理解することができる。とすると 00 年代半ばをピークに「ジェンダー」を冠した雑誌記事が現在に至るまで数を減らし続けていることは、第1に「ジェンダー」の衰退、第2に「ジェンダー」の与件化という、共存不能な2通りの解釈を誘う。この報告では、最後にこの2通りの解釈を若干肉付けし、テキストマイニングによってその妥当性を検証するための方策を提案する。